

PHIJ ベーシックコースを受講して

ササキデンタルクリニック

佐々木 成高

歯科医師となってからの 30 年は瞬く間に過ぎ去った。今振り返ると歯学部に在学中の 1980 年代の日本の歯科医学教育は、非科学的とまでは言わないが、歯科医学的な根拠 (EBD) があるとは言い難い内容であったと思う。卒後は口腔外科の医局に入局し、総合病院で研修する機会を与えられ、医科の研修医と同じカリキュラムで全科を回る経験をしたが、医科の臨床にも医学的な根拠 (EBM) があったとは言えず、各々の医師の経験値が治療法の選択を決定する大きな要素となっていたと記憶している。EBM (EBD) の概念が臨床の現場で徐々に使われだしたのは 1990 年代からで、我々日本の GP が口にするようになったのは今世紀になってからであろう。果たしてその意味を理解している同世代の歯科医師がどれほど存在しているのだろうか、いささか心配である。

未だに日本では、「歯科にはエビデンスは存在しない」と公言する歯科医師は数多く存在するが、そうした考えの方には是非とも PHIJ ベーシックコースを受講していただきたい。マクガイヤー先生、シャイヤー先生と宮本先生が提供する米国の歯科医学教育システム、つまりはグローバルスタンダードな歯周病学とインプラント学を、日本のディレクターである築山鉄平先生がご自身の経験を交えながら、EBD に基づいた講義と実技をされる、非常にシステマティックな内容となっていた。さらに、英文論文の翻訳と発表、症例発表とその評価は自院のスタッフとのディスカッションのよい機会となり、各自のレベルアップに大いに役立つものであった。また、築山雄次先生の GP と専門医との連携についての講義も素晴らしい内容であった。一方、本コースは日吉歯科診療所の熊谷崇先生等のオーラルフィジション育成セミナーで提唱する、MTM (メディカルトリートメントモデル) をベースとしていることも忘れてはならない。

惜しむらくは、このようなシステマティックで良質な講義と実習を 20 年前に、いやせめて 10 年前に受講することができたなら、自分の臨床が大きく変化していたと思う。若い歯科医師から、ある程度の経験を積んだ歯科医師まで、受講を強く推薦するコースである。

今後の展望として、AAP 主催の学術大会への出席、タフツ大学の見学とマクガイヤー先生のオフィスでのアドバンスコース等、魅力的なプログラムが用意されているので、全てに出席できるように努力したい。

最後に、7ヶ月間に渡りお世話になった、築山先生とつきやま歯科医院のスタッフの皆様、仲川先生と福田先生、同期の歯科医師と歯科衛生士の皆様には深く感謝致します。